美術教育学の制度的基盤の成立過程
－鳥取大学における人的制度と配置－

有田　洋子*

Yoko ARITA

A Historical Research on Establishment of the Staff of Art Education in the College :
The Case of the Faculty of Education of Tottori University

要　　旨

鳥取大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程（人的制度の成立と人的配置）を次のように明らかにした。1.鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部への移行：図画工作担当教官はほぼ大学に移行したが，美術科教育を専門とする教官はいなかった。しかし美術科教育関係授業を担当する教官は明確にいた。ただ制度的に美術教育の専門性は未だ保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。2.学科目の設置と具体的人員の配置：昭和48年４月より美術科教育の学科目に人員が置かれ実質化し，制度的に美術科教育の専門性が保証された。3.教科教育専攻大学院の設置と展開：美術科教育を専門とする二教官が揃い，平成８年４月に大学院教育学研究科美術教育専修が設置された。これにより，鳥取大学における美術教育学の制度的基盤が成立した。

【キーワード：美術教育史，美術教育学，学科目，大学院】

１．本稿の目的

本稿筆者は美術教育学の制度的基盤の成立過程を，全国の教員養成大学･学部の人的制度の成立と人的配置の調査から明らかにしようとしている。本稿は鳥取大学におけるそれを検証するものである。本研究における問題設定は既に別稿で述べた[1)]。調査は次の三段階の時期区分に基づいて行う。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学･学部への図画工作担当教官の移行
2. 学科目の設置と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開（人員の配置）

考察対象はこの三時期区分に基づき，戦前の師範学校から戦後の教員養成大学･学部への移行期を経て教科教育大学院の設置までとする。鳥取県師範学校，鳥取師範学校，鳥取大学学芸学部･教育学部･教育地域科学部における美術関係教官の人的配置表の作成にあたっては，その時期範囲を前後に拡大し，大正15年から平成15年までとする。

２．鳥取大学の場合の概観

(1) 鳥取大学学芸学部の特徴

1. 教養重視：師範学校から教員養成大学･学部への移行にあたって，学部名称は教育学部もしくは学芸学部が用いられた。鳥取師範学校は鳥取大学学芸学部となる。鳥取大学学芸学部の図画工作教官は，開設当初から教養部が廃止となる平成７年３月まで，教養講座と専門講座に分かれて所属した。ただ実際は教養講座の教官が専門講座の授業を担当することやその逆があった。

2. 改称と改組：昭和24年５月に学芸学部として開設後，文部省の方針によって，昭和41年４月に教育学部へ改称，平成11年４月に教育地域科学部へ改組，さらに平成16年４月に地域学部へ改組される。なお開設当初は学芸学士[2)]，その後は教育学士か学芸学士（教職課程を修得しない者）のいずれかを[3)]，そして教育学部への改称を機に教育学士[4)]，教育地域科学部への改組を機に学校教育課程は教育学士（平成３年度卒業以降は学士（教育））[5)]，地域学部への改組を機に学士（地域学）[6)] の学位が授与される。

(2) 鳥取大学における三時期区分の概観

1. 鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部への移行：鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部へ図画工作教官はほぼ移行できた。この時期，美術科教育を専門とする教官は不在であった。ただ学科目制度に先んじて美術科教育関係授業を担当する教官は明確にいた。美術科教育関係授業は初期は在職教官全員で分担していたが，昭和31年度からは東京美術学校図画師範科出身の船井美周（よしちか）が主に担当するようになった。初期の在職教官のほとんどは小中高等学校での教諭歴を有しており，船井以外は鳥取県出身であった。船井は絵画と美術教育の両方を担当していた。この時期は制度的には美術教育の専門性は保証されてお

*　島根大学教育学部芸術表現教育講座

らず，ましてや「美術教育学」は認識されていなかった。

2. 学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年学科目制度発足以後も，学科目「美術科教育」は暫く置かれず，昭和48年４月に新設された。船井がその担当教官になった。それまで絵画･美術教育を担当していた船井が，学科目「美術科教育」の担当となることで，美術科教育の専門性は制度的に保証されたと言える。船井は名目だけの美術科教育担当ではなく，美術科教育に関する業績を有する。船井の後任には，大勝恵一郎，浜本昌宏，菅沼嘉弘と「美術教育を進める会」の歴代代表が続く。

3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：平成４年に高浦浩，平成７年に喜久山悟と美術科教育を専門とする二教官が赴任し，平成８年に美術教育専修の大学院が設置された。二教官とも実技発表を続けたことが特徴的である。鳥取大学の場合，この時期に美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

大正15年から平成15年までの，鳥取県師範学校，鳥取師範学校，鳥取大学学芸学部･教育学部･教育地域科学部における美術関係教官の人的配置を表１に示しておく[7]。

３．各時期区分における様相

(1) 鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部への移行期

①大学への移行期の様相　昭和24年５月，米子医科大学，米子医学専門学校，鳥取農林専門学校，鳥取師範学校，鳥取青年師範学校を母胎として鳥取大学は発足した[8]。発足当初，学芸学部，医学部，農学部が設置された。

学芸学部は，鳥取師範学校男子部(鳥取市東町)，鳥取師範学校女子部(八頭郡国中村･鳥取県立八頭高等女学校併設)，鳥取青年師範学校男子部･女子部(東伯郡上井町)を母胎とした[9]。青年師範学校では図画科そのものが置かれないことがあり，鳥取青年師範学校もそうであった。昭和26年３月の師範学校生徒の卒業まで，鳥取大学鳥取師範学校･鳥取大学鳥取青年師範学校が存続したように，大学への移行は徐々に行われた。師範学校から大学への移行に伴う教官人事は全国的にそうであったように難航したらしく[10]，大学への教官の移行も徐々に行われた。

学芸学部は開設当初の鳥取市東町(尚徳館跡)から，昭和25年８月25日に鳥取市立川町の旧47部隊兵舎跡の岩倉の地へ移転し，さらに教育学部に改称となった昭和41年８月15日に鳥取市湖山町の三浦の地に他学部とともに統合移転した[11]。

新制大学教育学部･学芸学部は，戦前の師範学校教育の反省から教養教育を重視した。鳥取大学学芸学部においても教養教育は重視される。鳥取大学学芸学部は教養講座と専門講座から成る。国立学校設置法施行規則の一部改正を受けて，昭和42年に教養講座は鳥取大学全学部の教養科目を担う「教養部」として独立し，平成７年３月まで存続する[12]。

開設当初，学芸学部は「一般教養学科」と「専門学科」の二つから成り，一般教養学科は人文科学･社会科学･自然科学の３系列に分かれ，その下に哲学講座･化学講座等の14講座が置かれる。専門学科には，教育学第一講座，音楽講座等の14講座が置かれる[13]。美術に関係する講座は，一般教養学科－人文科学系列－「芸術講座」，専門学科－「美術講座」である。昭和26年度には上記２学科が「一般教養講座」と「専門講座」と改称されて，それまで同様それぞれに14講座が置かれる[14]。美術に関係する講座は，一般教養講座－「芸術」，専門講座－「美術」となる。本稿では，便宜的に前者を教養講座(芸術)，後者を美術講座と呼ぶこととする。

学芸学部開設当初の図画工作教官も，教養講座(芸術)と美術講座に配置され，この体制は教養部が廃止されるまで続く。学芸学部開設当初の図画工作教官定員は，教養講座(芸術)に助教授１，美術講座に教授１･助教授３･講師１であった[15]。美術講座の教官定員は学芸学部の中で体育講座に次いで二番目に多かった。

鳥取師範学校男子部から八田正夫(図画)と池本恵治(工作)，同女子部から船井美周(図画工作)，横川芳松(書道)が鳥取大学学芸学部に移行する。そして昭和25年に浜田重雄(絵画)，昭和26年に松上茂(工芸)が採用される。前述のように船井以外は鳥取県出身であった。鳥取師範学校が廃止となり大学への教官の移行が完了した昭和27年の教官構成を以下に示す。

[昭和27年]

美術講座			出身校	出身地
教授	絵画	浜田重雄	東美校西	鳥取
助教授	絵画	船井美周	東美校図師	愛知
助教授	工芸	池本恵治	文検	鳥取
講師	工芸	松上茂	帝国美	鳥取
講師	書道	横川芳松	鳥師･文検	鳥取
教養講座(芸術)				
助教授	絵画	八田正夫	鳥師･文検	鳥取

参照：鳥取県教育委員会事務局指導調査課『鳥取県教育関係職員録』昭和27年度
「教官名簿」鳥取大学学芸学部『学生手引』昭和27年度

鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部に移行した教官の略歴を次に示す。

八田正夫(明治40－平成10)は[16]，鳥取県気高郡気高町宝木(現･鳥取市気高町宝木)に生まれる。鳥取県師範学校本科を昭和２年３月に卒業し，同専攻科で物理化学･図工を学び昭和３年３月に卒業し，同年東伯耆郡小鴨小学校教諭となる。昭和７年結婚により岩井姓から八田姓となる。昭和９年文部省中等教員検定試験(以下，文検と略記)西洋画･用器画に合格し，昭和13年３月から鳥取県師範学校教諭となる。昭和13年から昭和20年まで鳥取県図画視学委員を務める。昭和18年学徒動員に伴い神戸三菱工場で従事する。昭和19年舞鶴工廠に転じ特殊潜航艇「人間魚雷」を製作する。昭和21年尾崎悌之助らと「山陰美術協会」結成。昭和24年鳥取大学学芸学部助教授となる。昭和48年４月に定年退官を迎えるまで，所属は教養講座(芸術)であった。ただ後述するように，美術講座の美術科教育関係授業や実技授業も受け持っていた。研究発表は絵画を主とし，そのほか彫刻や陶芸も行った[17]。

池本恵治(号恵鳥)(明治39−平成４)は[18]，鳥取県八頭町に生まれる。小学校中退後，独学で小学校教員免許を取得し，昭和７年６月22日から同年８月31日まで池本の母校である鳥取県八頭郡隼尋常高等小学校の代用教員となる[19]。その後，「文部省中等大学教官免許」(ママ)を取得し，鳥取県立鳥取第一中学校教諭となったらしい[20]。昭和17年４月１日から航空機乗員養成所教諭，昭和20年12月28日から鳥取師範学校書記兼鳥取師範学校男子部教諭となる。鳥取師範学校では工作を中心に担当する。なお，昭和25年度は「機械機工学」を担当する[21]。昭和26年３月31日鳥取大学学芸学部に助教授として移行する。研究発表は彫塑を主としつつ絵画等もある。授業は彫塑のほか金工や木工等，工芸全般を受け持った[22]。定年退官後，近畿大学豊岡女子短期大学に勤務した。

船井美周(明治43−昭和58)は[23]，愛知県豊橋市に生まれる。昭和５年３月31日から愛知県岡崎市岡崎尋常高等小学校訓導(本科正教員)となる。昭和13年３月東京美術学校図画師範科を卒業し，同年４月16日から岐阜県立大垣中学校教諭，昭和15年４月15日から鳥取県立鳥取高等女学校教諭となる。昭和23年５月31日から鳥取師範学校女子部に赴任し，図画と工作を担当する[24]。赴任後も暫くは男女共学となった八頭高等学校に出講する。昭和26年３月31日鳥取大学学芸学部に助教授として移行する。鳥取大学では最初は絵画を，昭和31年度から絵画と美術教育を担当する。画業に関しては，昭和13年に文展に入選，昭和14年に大潮会展に入選等し，戦後は中央展には出品しなかった[25]。研究発表は，洋画のほか，戦前から美術教育雑誌への寄稿があり，戦後は美術教育に関する論考･論文も多く発表していった。

横川芳松(号三隅･雪峯)(明治18−昭和46)は[26]，鳥取市に生まれ，鳥取県師範学校を卒業し，文検に合格し，鳥取県師範学校訓導･教諭を経て，鳥取大学学芸学部講師となる。美術講座所属の書道教官であった。横川の昭和33年３月定年退官以降，書道教官は美術講座に置かれない。昭和49年４月に学科目「書道」が新設され[27]，国語講座に書道教官が置かれることとなる。本稿では，書道に関する言及はここまでとする。

以上，鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部へ移行した教官の特徴に，１.船井以外は鳥取県出身者であること，２.小中高等学校での教諭経験があることが挙げられる。

さらに大学開学直後に着任した二教官の略歴を記す。浜田重雄(改名･宜伴)(明治33－昭和63)は[28]，鳥取市に生まれ，大正６年３月鳥取県立鳥取中学校を卒業して上京し，川端画学校に通う。大正７年４月東京美術学校西洋画科に入学し，藤島武二の指導を受け，大正12年３月同校を卒業する。大正13年３月岡山県立津山高等女学校教諭，大正14年３月鳥取県立鳥取第一中学校教諭となる。昭和22年４月鳥取市立西中学校校長，昭和24年３月鳥取市立北中学校校長となる。昭和25年10月鳥取大学学芸学部教授(主任教授)となる。絵画を担当する。当時の鳥取県出身画家の多くがそうであったように，浜田も前田寛治を敬慕しており[29]，1930年協会展，独立美術協会展等に出品する。中井金三を中心に前田らによって結成された砂丘社に加わり，川上貞夫らと鳥取砂丘社を結成した。

松上茂(大正３－　)は[30]，鳥取市に生まれ，昭和12年に帝国美術学校(現･武蔵野美術大学)を卒業し，松屋百貨店専属デザイナー，松江美術工芸学院教授を経て，昭和26年４月より鳥取大学学芸学部講師となる。工芸･図案･デザインを担当する。初期の編著書に『更生と工夫のスタイルブック 服装手帳』(島根新聞社，昭和23年)がある。徐々にデザイン教育に関する著書や論文が増える。昭和50年に岡山大学教育学部へ転出した。

以上，鳥取師範学校から鳥取大学学芸部へ移行した教官及び新着任した教官の特徴は，次のようにまとめることができる。１.多くは鳥取県出身であること。県内出身者を採用することは地方大学に比較的多い。２.小中高等学校での教諭経験があること。さらに付け加えるならば，鳥取県立鳥取第一中学校縁の人員構成であることも挙げられよう。鳥取第一中学校は，藩校「尚徳館」を前身とする現･鳥取県立鳥取西高等学校である。浜田と池本は鳥取第一中学校教諭歴があり，浜田は同窓生でもある。なお初代学芸学部長の米原穣[31]をはじめ他講座の教官にも鳥取第一中学校同窓生は少なくない。

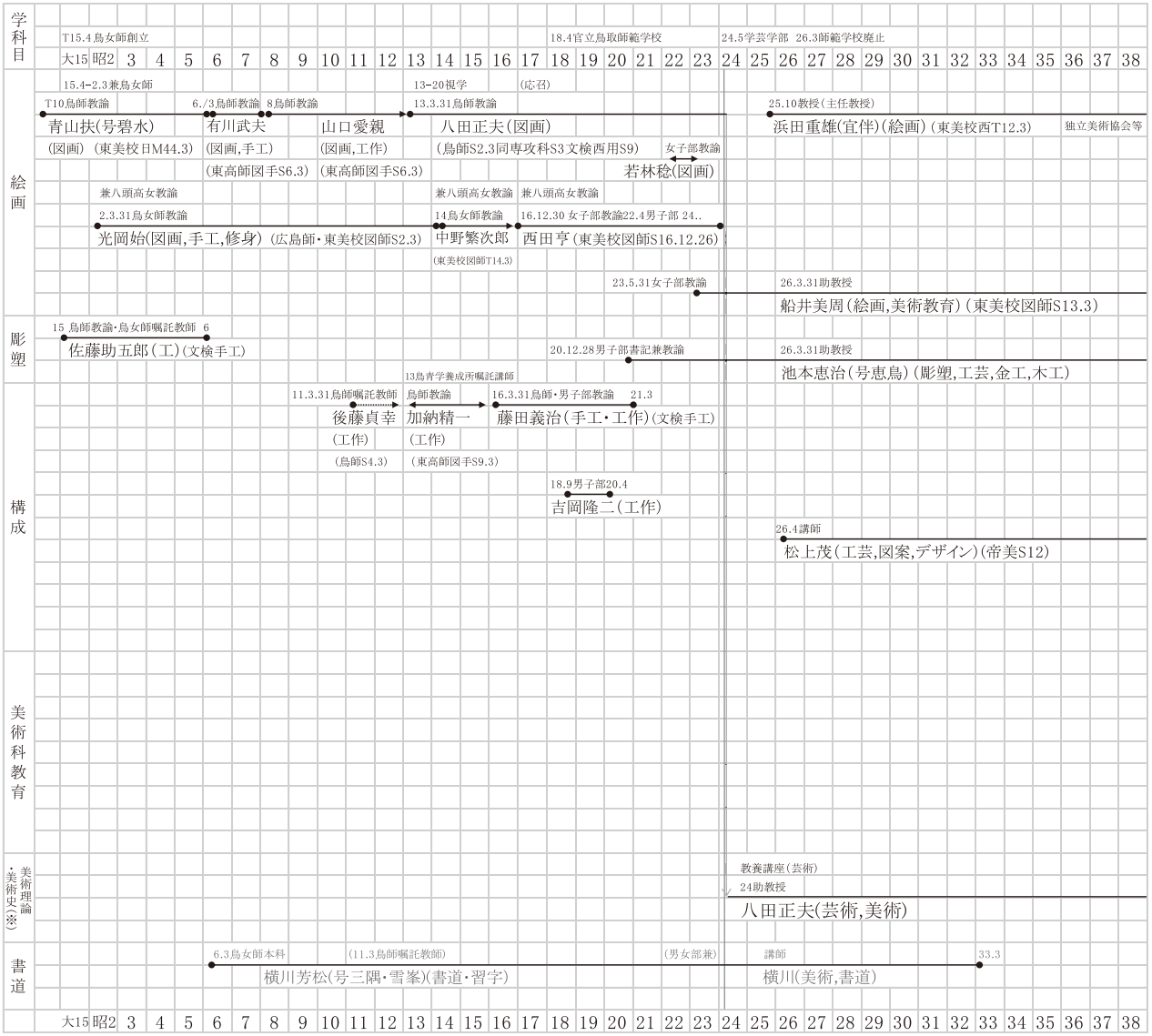
ただ，昭和23年以前は多様な出自の教員が揃っていた。ここからは遡って，大学設置直前の昭和元年から昭和23年までの在職教員を見ていく。

まず，大学設置直前の昭和23年に在職が確認されるものの大学に移行しなかった教員に西田亨がいる。西田亨(大正９－　)は[32]，岡山県出身で，昭和16年12月26日東京美術学校図画師範科を卒業し，その直後12月30日鳥取県女子師範学校教諭(鳥取県立八頭高等女学校教諭兼任)となる。昭和18年５月から臨時招集により現職にて兵役，昭和20年３月第三航空軍司令部(シンガポール)で陸軍少尉として暗号教育を担当し，昭和21年６月４日召集解除の後，昭和22年４月鳥取師範学校男子部に戻る。図画のほか工作を担当したこともある[33]。昭和24年４月から東京都江東区立深川第四中学校教諭となる。当時，画業への専念を希望していた地方在勤の図画教諭は，勤務学校種等にとらわれず東京での勤務を希望するものが多かった[34]。昭和31年４月から茨城大学教育学部講師となった。光風会の画家として知られることとなる。

昭和22･23年頃に鳥取師範学校女子部の図画教官に若林稔がいたと思われるが，詳細は不明であった[35]。

昭和20年前後に在職が確認されたものの大学に移行しなかった教員に，吉岡隆二と藤田義治がいる。両名とも男子部の工作担当教員である。藤田は，文検(手工)出身で，昭和10年頃は静岡県の見附中学校に在職し，昭和16年３月から21年３月まで鳥取県師範学校に勤務する[36]。徳島県出身の藤田は，その後，徳島県立鳴門商業高等学校や徳島大学で教える[37]。また，阿波竹人形の創始者竹仙として名を知られることとなる。吉岡は，群馬県師範学校出身で，鳥取師範学校に昭和18年９月から昭和20年４月まで勤務の後，昭和26年から群馬大学教育学部技術講座に着任する[38]。

表 1



※平成７年に教養部が廃止されるまで、美術史・美術理論を相当する教官は教養講座(芸術)の所属であった。

鳥取師範学校の人員構成

[昭和23年]

鳥取師範学校男子部

教授	図画	八田正夫
助教授	工作	池本恵治

鳥取師範学校女子部

助教授	図画	西田亨
助教授	図画工作	船井美周
講師	書道	横川芳松

鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿(昭和二十三年四月現在)』，鳥取大学学芸学部『会員名簿(昭和35年版)』等より作成。

鳥取大学発足直後の人員構成

[昭和24年]

鳥取大学学芸学部

教養講座(芸術)

助教授	八田正夫

鳥取大学鳥取師範学校

文部教官	船井美周
文部教官	池本恵治
文部教官	横川芳松

上記表より作成。

[昭和25年]

鳥取大学学芸学部

助教授	美術	八田正夫
(兼)助教授		池本恵治
(兼)講師		横川芳松

鳥取大学鳥取師範学校

教官	機械機工学	池本恵松
教官	美術	船井美周
講師	習字	横川芳松
(兼)教授		八田正夫

昭和25年4月20日現在

鳥取県教育委員会事務局調査企画課『鳥取県教育関係職員録』より作成。

[昭和26年]

鳥取大学学芸学部

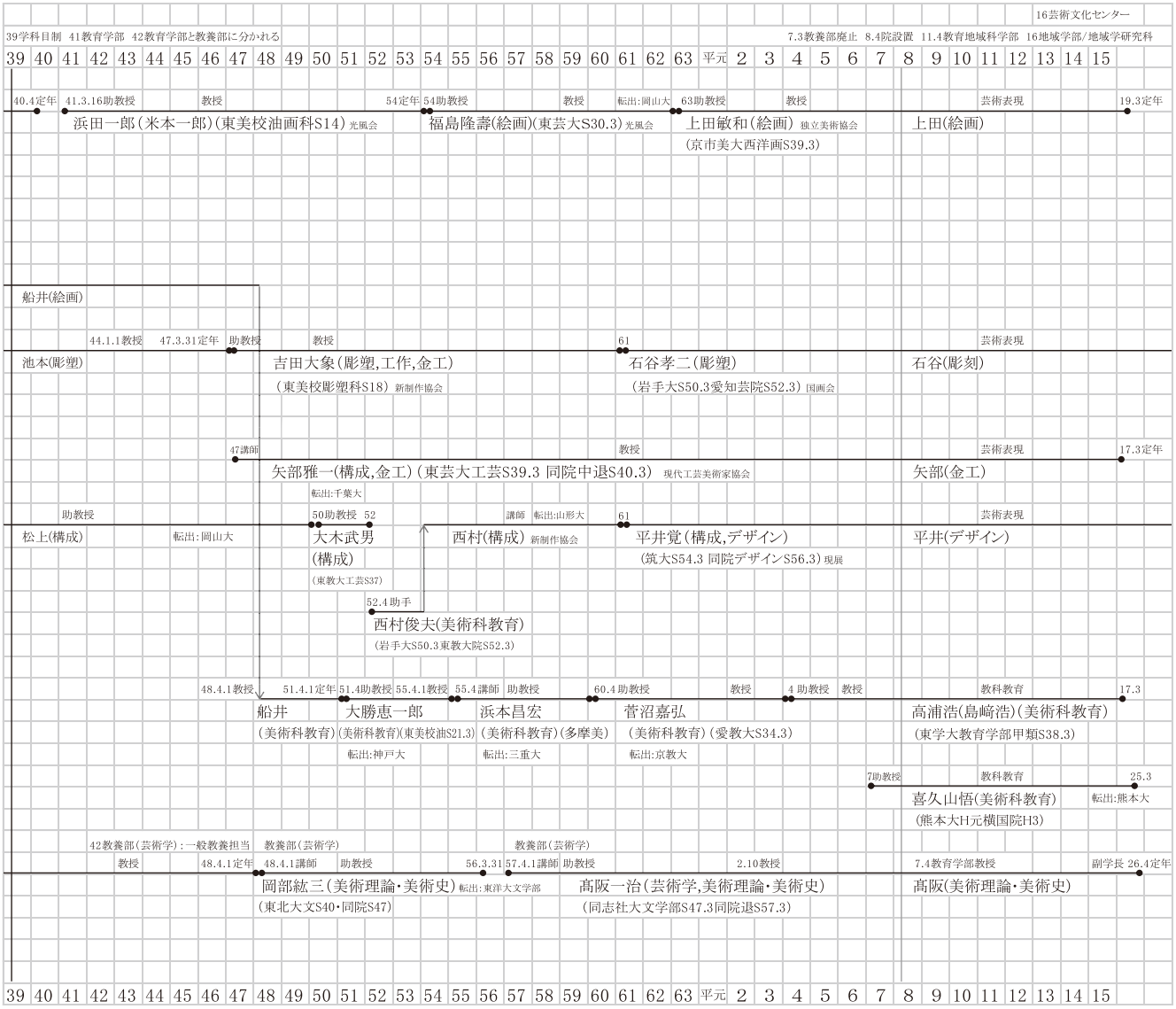
美術講座

教授	浜田重雄
助教授	船井美周
助教授	池本恵治
講師	松上茂
講師	横川芳松

教養講座(芸術)

助教授	八田正夫

上記表より作成。



凡例

○横の実線は在職期間を示す。点線(……)は非常勤講師としての在職期間を示す。
○横の線の両端の数字が就任と退任の年月を表す。
○横の線の端が黒丸の場合は就任あるいは退任の年(月)が明確であることを示す。
○横の線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実であることを示す。
○横の線の上部には職位とその就任年月を示す。平成26年現在在職教員に関しては示さないことを原則とする。
○職位の左に就任年月が示されていないものは、その年度の職員録に記された職位を示したものである。そのため現実にはそれより以前の就任である可能性がある。
○後任者が前任者転退任年と同年の次月以降に就任した場合、その月の境を斜線(/)で示す。
○人名の後の括弧内には学科目ないし担当教科を示す。さらにその後に修学校名の略記と卒業あるいは修了年月を示す。
○副手，技能補佐員は示していない。
○修学校の略記は以下のように行う。鳥師：鳥取県師範学校(昭和17年以前)。鳥取師範学校(昭和18年以降)。 鳥女師：鳥取県女子師範学校。
男子部：鳥取師範学校男子部。女子部：鳥取師範学校女子部。鳥青学養成所：鳥取県立青年学校教員養成所。八頭高女：鳥取県立八頭高等女学校。
文検：文部省中等学校教員検定試験。東美校図師：東京美術学校図画師範科。東芸大：東京芸術大学。東高師図手：東京高等師範学校図画手工専修科。東教大：東京教育大学。
帝美：帝国美術学校。 京市美大：京都市立美術大学。 多摩美：多摩美術大学。 東学大：東京学芸大学。 愛教大：愛知教育大学。 京教大：京都教育大学。

さらに遡って昭和元年までの鳥取県師範学校図画教員の青山扶・有川武夫・山口愛親，鳥取県女子師範学校図画教員の光岡始・中野繁次郎に関しても記しておく。全体として出自は様々であるものの，修学校の同門・同期あるいは転任先で再び同僚となる事例が見られた。

青山扶（たすく）（号碧水）は[39]，島根県出身で，明治44年３月東京美術学校日本画科を卒業後，明治44年４月から大正６年11月まで秋田中学校で勤務し，そこで画のほか英語と習字を教え，大正６年11月から10年９月まで島根県の杵築中学校で勤務する[40]。大正10年から昭和６年にかけて鳥取県師範学校勤務及び大正15年から昭和２年まで鳥取県女子師範学校・八頭高等女学校兼務の後，昭和６年から兵庫県伊丹高等女学校，昭和９年から大阪府私立金蘭会高等女学校に赴任する。青山の後任の有川武夫は[41]，広島県出身で，昭和６年３月東京高等師範学校図画手工専修科を卒業し，昭和６年から８年にかけて鳥取県師範学校に在職する。その後，台湾新竹中学校へ移り，昭和15年に台湾新竹師範学校に赴任する[42]。その後広島県の幾つかの中学校校長を歴任した後，武田学園の事務局長兼可部女子短期大学（現・広島文教女子大学）講師となる[43]。有川の後任の山口愛親は[44]，鳥取県出身で，昭和６年３月東京高等師範学校図画手工専修科を卒業し，昭和８年から13年頃まで鳥取県師範学校に在職した後，大阪府私立大谷学園高等女学校に赴任する。

光岡始は[45]，広島県出身で，広島県師範学校卒業後，昭和２年３月東京美術学校図画師範科を卒業する。昭和２年から14年にかけて鳥取県女子師範学校に在職し，図画のほか手工や修身も担当する。昭和14年２月に山口県宇部高等女学校へ移る[46]。後に広島文教女子大学に赴任する[47]。光岡の後任の中野繁次郎は[48]，大正14年３月東京美術学校図画師範科を卒業後，昭和14年から16年頃まで鳥取県女子師範学校に勤務する。

手工・工作教員には先述の吉岡・藤田のほか，佐藤助五郎と加納精一が確認された。佐藤助五郎は[49]，大分県出身で，大正15年から昭和６年にかけて鳥取県師範学校で手工を担当する。昭和６年以降の鳥取県師範学校には図画と手工をともに担った有川と山口が在職したためか，手工教員は確認されなかった。昭和13年図画教員の八田の赴任に伴い，同時期，手工教員として加納が赴任する。加納精一は[50]，昭和９年３月東京高等師範学校図画手工専修科を卒業後，昭和13年から16年まで鳥取県師範学校に在職が確認され，昭和16年４月から18年２月まで高知県師範学校に勤務した。なお嘱託教師ではあるが，昭和11・12年は鳥取県師範学校を卒業した後藤貞幸が同校に在職する。後藤は昭和13年から鳥取県師範学校附属校訓導となり，その後は鳥取県の小学校校長等となった[51]。

②大学移行後の展開　さらに大学移行後の展開を見る。他大学では，大学発足直後の教官構成によっては，外部から新たに，学士取得者，旧帝大系教官，東京美術学校出身等の実技の実力者，日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者等を教授採用等の厚遇で招聘し，講座は大きく様変わりすることがあった。鳥取大学の場合，師範学校から移行した教官を中心に，比較的穏やかに進んでいったものと思われる。教官構成は，開設期の八田，池本，船井，浜田，松上の体制が長く続き，昭和40年代になるまで構成員に異動はなかった。

③この時期の教科教育関係授業　この時期，他の多くの大学でもそうであったように，美術科教育を専門とする教官は不在であった。ただ美術科教育関係授業はあるわけで，鳥取大学の場合，誰が担当していたのであろうか。昭和24−36年の各年度の開講授業と担当教官が記された資料が残されている。鳥取大学学芸部発行の，昭和24−25年度『学生手引』，昭和26年度『学芸学部履修規定』，昭和27−28年度『学生手引』，昭和29−31年度『学生便覧』，昭和32−36年度『履修規定とその解説』の示す「図工の教材の研究」「図工教育法」等の教材研究及び図工・美術科教育法の教科教育関係授業の担当者は次の通りである。

昭和　24　年：八田のみ。
昭和　25　年：八田・浜田・池本で分担。
昭和　26　年：浜田・池本・船井で分担。
昭和　27　年：八田・池本・船井で分担。
昭和28−29年：八田・浜田・池本・船井・松上全員で分担。
昭和　30　年：八田・浜田・池本・船井で分担。船井の受け持ちが増える。
昭和31−36年：船井を中心に，浜田・池本も分担。全ての美術科教育関係授業の担当者に船井の名が挙げられる。

このように，開設当初は八田が，その後徐々に在職教官全員で分担していったが，さらに船井が多くを担うようになり，昭和31年度以降は美術科教育関係授業の全てに船井が関わるようになっていく。

ただし昭和24年度に関しては，師範学校から大学移行期ゆえの特別な状況と判断しておく。『鳥取大学三十年史』も「昭和27年度を完成年度とする学芸学部」としている[52]。昭和24年度『学生手引』所収「開講科目」によると，美術関係授業は四つのみ，美術関係教官は八田一人だけが示される。そもそも大学設置直後で教官は移行途中で学生も揃っていないので，このように授業数も教官数も少ないのであろう。なお教養講座で芸術の授業は開講されていない。専門学科の「図工科教材研究」（小学校・教材研究），「素描実習」「色彩理論実習」「美術」（図工）の四つの授業を八田が担当している[53]。

上記の昭和27−36年度の資料には「教官名簿」があり，各教官の担当が記される。以下にそれを表にする。

	昭27	昭28	昭29	昭30	昭31−36
船井	絵画	美術（洋画）	美術（洋画）	美術（洋画）・美術史	絵画・美術教育
浜田	絵画	絵画	絵画	絵画・芸術	美術史美術理論・絵画
池本	工芸	工芸	工芸	工芸・彫塑	工芸・彫塑
松上	工芸	図案デザイン	図案デザイン	図案・工芸	図案・工芸
横川	書道	書道	書道	書道	書道
八田	絵画	美術	美術	図画・工芸	芸術

昭和31年度から船井は「絵画･美術教育」担当と「教官名簿」に記される。先述の美術科教育関係授業の全てに船井の名が挙がる時期と一致する。ただ表記は「絵画」が先なので，絵画が主，美術科教育は副だったのであろう。

八田･浜田･池本は小中学校教諭経験があり，美術科教育関係授業を担当する可能性はあったと思われる。松上は元デザイナーで，図案･デザインが専門とはいえ，後に『デザインによる教育』（美術出版社，昭和37年）等の専門教育と一般教育の違いを了解した上でのデザイン教育に関する著書や論考を多く発表していくことからも担当できないことはないであろう。

しかし，図画工作に関することなら何でもできるとされた図画師範科出身者で，美術教育に関する論考も発表していた船井が，主として美術科教育関係授業を担うようになっていく。上記の昭和30･31･33年度の資料では船井は「児童画論」という授業も受け持っている。

船井は戦前から図画教育雑誌に文章を発表していた。例えば，「外人の見た日本美術」（『美育』第17巻第７号，昭和16年）がある。昭和20年代も雑誌等に版画教材を中心に論考を発表している。昭和30年代は美術教育に関する論考が発表され始める。「今日における一考察」（『美術教育』第74号，日本美術教育学会，昭和36年）等がある。そして昭和40年代から論文が増える。「美術創作の本質と美術教育」（『鳥取大学教育学部研究報告』第11巻第１号，昭和44年）等，紀要に論文が多く発表される。初期の美術教育研究者の一人として船井美周は位置づけられるであろう。以下に戦後に発表の確認された美術教育に関する船井の文章･論文を抜き書きする。

昭和27「パス版の研究」『教育美術』第13巻第８号 10−11頁
昭和28「簡易謄写版画」『教育美術』第14巻第２号 22−24頁
昭和32「新しい教材のために 滲透版画の作り方」『美術手帖』第122巻94−95頁
昭和36「今日における一考察」『美術教育』第74号16−17頁
昭和38「造形性に関する基礎的考察」『美術教育』第99号21−24頁
昭和41「創造性と創造活動」『美術教育』第134号3−6頁
昭和41「絵画作品の空間性について」『鳥取大学教育学部研究報告』第17巻125−137頁
昭和42「美術教育における表現活動の指導について」『美術教育』第142号７－９頁
昭和44「美術創作の本質と美術教育」『鳥取大学教育学部研究報告』第11巻第１号51−76頁
昭和44「版画手法の研究」前掲書，第11巻第２号83−93頁
昭和45「絵画制作手法の基本類型」前掲書，第12巻第１号 33−50頁
昭和46「フリーハンド画法の特質」前掲書，第13巻第２号61−75頁
昭和46「フリーハンド画法以外の絵画技法」前掲書，第13巻第１号83−100頁
昭和47「構図について」前掲書，第14巻第２号57−72頁
昭和47「美術制作におけるデフォルマシオン」前掲書，第14巻第１号57−72頁

船井の没後，子息で画家･美術教育者の船井武彦によって，船井美周の論集『絵画･美術教育への思索』（平成９年），画集『折々の彩：船井美周画集』（平成10年）が出版される。

以上，鳥取大学の場合，学科目制度に先んじて，昭和31年度から，絵画も担当しているとは言え，船井が美術科教育関係授業を主に担当する教官として定着した。

なお，学芸学部開設期は教官の所属と担当授業の関係は柔軟であった。例えば八田は大学移行当初から定年退官するまで教養講座（芸術）･教養部の所属であったが，教養講座（芸術）の授業を担当するのは昭和31年からであった。前記の鳥取大学学芸学部発行の資料によると，昭和24年度は教養講座の芸術の授業自体開講されず，昭和25年度から開講された芸術の授業は美術講座所属の浜田重雄が担当する[54]。昭和26−28年度は浜田と音楽講座の田村熊蔵が[55]，昭和30年度は田村と榊兵治の音楽講座の二人が担当する[56]。そして昭和31年度から八田が担当するようになる。上記の「教官名簿」でも昭和31年度から八田は「芸術」担当と明記されるようになる。船井が美術教育を明確に担当する時期と重なる。鳥取大学の場合，昭和31年度頃から教官の担当が明確化していったと思われる。

(2) 学科目の設置と具体的人員の配置

昭和39年２月に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が定められ[57]，教員養成大学･学部の美術講座に，絵画，彫塑，構成，美術理論･美術史，美術科教育を基本とする学科目が置かれることとなる。いわゆる学科目制度の発足である。それまでの漠然とした区分けが，学科目制度を機に教官の専門性が明確化していくこととなる。示される学科目は大学によって若干異なり，まず前年の昭和38年に，文部省から各大学に学科目案の照会があった後，昭和39年２月に同省令，同年４月に同省令の改正が定められた。同省令及び改正省令によると鳥取大学には，絵画，彫塑，構成，美術理論･美術史が示された[58]。発足時の学科目制はそれまでの教官配置の実情を考慮した移行的なものであったらしい[59]。なお，同時期の昭和41年４月に国立学校設置法の一部を改正する法律が公布され，鳥取大学学芸学部は鳥取大学教育学部に改称される[60]。

学科目制度発足後の昭和39年度の鳥取大学の美術関係学科目とその担当者は，絵画：浜田･船井，彫塑：池本，構成：松上，美術理論･美術史：八田となる。前章で記したように，鳥取大学の場合，学科目制度発足以前から美術科教育関係授業は船井が主として担当していた。そして正式に学科目「美術科教育」が新設され，船井がそこに貼り付けになるのは昭和48年４月であった[61]。学科目制度発足期は，学科目「美術科教育」を満たすことが第一で，その担当者の研究内容との一致は厳密には問われなかった。そのため学科目「美術科教育」担当でありながらも，作品制作あるいは美術史･美学を専門とする教官が充てられる場合も少なからずあった。そのようななか鳥取大学の場合は，美術科教育の業績をもつ船井が学科目「美術科教育」を担当する。学科目とその担当者の専門がともに「美術科教育」で満たされた。

さて学科目「美術科教育」新設の頃は，定年退官や転出が重なる時期で，開設以来変動のなかった美術講座の構成員が様変わりしていく。まず美術科教育の学科目担当のその後の展開を見る。

船井は学科目「美術科教育」の担当となった４年後の昭和51年４月に定年退官となる。その後任には，大勝恵一郎，浜本昌宏，菅沼嘉弘と「美術教育を進める会」の歴代代表が入れ替わりで着任していく。「美術教育を進める会」

は「セクトを乗り越えて前進しよう」のスローガンの下，大勝，浜本の提唱によって昭和34年４月発足した会である[62]。初代事務局長が大勝，二代が浜本，五代が菅沼である。

大勝恵一郎（大正13−平成22）は[63]，東京都で生まれる。昭和17年４月東京美術学校油画科入学，昭和21年３月卒業，昭和21年４月から東京都立第五中学校で授業嘱託，昭和23年７月から第五中学校の後身の東京都立小石川高等学校教諭として昭和51年３月まで勤める。昭和51年４月鳥取大学教育学部に赴任する。鈴木寛男とともに美術科教育学会の前身である大学美術教科教育研究会の発起人となる。その後，昭和55年４月神戸大学教育学部，昭和60年４月静岡大学教育学部，昭和63年４月常葉学園短期大学に転出していき，平成６年３月定年退職となる。共著書に『美術教育の構造』（ダヴィッド社，昭和59年）等，論文は「子どもの絵の発達について」（『鳥取大学教育学部研究報告』第20巻第１号，昭和53年）等がある。

浜本昌宏（昭和８年−　）は[64]，広島県に生まれ，多摩美術大学卒業後，東京都の小中学校教諭を経て，昭和55年４月に鳥取大学に赴任する。昭和60年に三重大学教育学部に転任する。日本版画集団会員でもあった。著書に，民衆社から『ナイフでつくる』（昭和52年）・『ハサミでつくる』（昭和54年）・『ねん土でつくる』（昭和56年）・『竹でつくる』（昭和59年）等，論文は「美術教育における手の働きと素材・道具論（Ⅰ）」（『鳥取大学教育学部研究報告』第23巻，昭和56年）等がある。

菅沼嘉弘（昭和11−　）は[65]，愛知県に生まれ，昭和34年愛知教育大学を卒業する。東京都国分寺市立第一小学校・小金井市立前原小学校等で26年間図工・美術教育に携わった後，昭和60年４月に鳥取大学に赴任する。平成４年に京都教育大学へ転任する。著書に『シリーズ・あそんで作る５ 土とあそぶ』（草土文化社，昭和61年），『子どもと手仕事―工作教育ノート』（あゆみ出版，平成２年）等がある。論文に「野焼きの教育的意義と焼成方法」（『鳥取大学教育学部研究報告』第28巻第２号，昭和61年）等がある。

なお，昭和52年４月に助手として赴任する西村俊夫（昭和25−　）は，昭和52・53年度『鳥取県教育関係職員録』によると，書類上は着任当初の学科目は美術科教育である。暫くして構成に移る。西村は，昭和50年３月に岩手大学教育学部を卒業し，昭和52年３月に東京教育大学大学院教育学研究科修士課程美術学専攻を修了の後，同年４月鳥取大学教育学部に赴任する[66]。昭和61年４月に山形大学へ，平成５年４月に上越教育大学へ転出する。西村は「デザイン教育の領域に関する一考察」（『鳥取大学教育学部研究報告』第34巻，昭和58年）等，デザイン・工作教育に関する論文も多数発表していく。

あわせて学科目「構成」の人的変遷も見ておく。デザイン教育を研究していた松上茂が岡山大学に転出し，その後任として昭和50年に赴任するのが，大木武男である。大木は松上同様，デザインに関する作品発表と論文発表とをともに行うスタイルであった。大木は「商品の論理とデザインの論理(1)（A）市場の論理」（『鳥取大学教育学部研究報告』第17巻第１号，昭和41年）等の論文を発表する。さらに，三一書房から『デザインの全体像』（昭和46年）を出版する。千葉大学教育学部に異動してからの研究分野は哲学及び美学・美術史となる[67]。大木・西村は，美術科教育に関心があったと思われる。

大木より数年早く昭和47年に，構成担当者としてもう一人，東京芸術大学を卒業した金工家の矢部雅一が赴任する。学習指導要領改訂に対応させて工芸を独立させる意図から，純増で採用された[68]。

彫塑の池本の後任には，東京美術学校を卒業した新制作協会所属の彫刻家の吉田大象が赴任する。

絵画に関しては，他の開設期メンバーより一足早く昭和40年４月に浜田重雄が定年退官を迎える。その後任は，新しく美術科教育の学科目では採らず，絵画の学科目で浜田一郎を採用する。浜田一郎（号・米本一郎[69]）（大正３−平成４）は[70]，浜田重雄と同じく鳥取県・東京美術学校油画科の出身である。倉吉中学校で図画教諭中井金三に学んだことを機に美校に進む。大病を患いながらも倉吉東高等学校・羽合中学校・由良育英高等学校等での教職と，光風会で作品発表を続け，昭和40年９月光風会による欧州留学から帰朝したところ，鳥取大学へ採用される。

なお中井金三は前田寛治ら多くの美術家を育てる。大正９年に中井を中心に前田らによって芸術団体「砂丘社」が結成される。大正15年に浜田重雄，昭和10年に浜田一郎が砂丘社に加わる。八田も砂丘社に刺激を受けていた[71]。また，浜田重雄も八田も前田を慕っていた[72]。そのような縁もあってか，浜田一郎は浜田重雄の推薦を受けて鳥取大学採用となったらしい[73]。鳥取県縁の人員構成は浜田一郎が最後となる。その後任として，光風会の福島隆壽，独立美術協会の上田敏和が続く。

なお，教養講座（芸術）所属であった八田の後任は，教養講座（芸術）教官としての採用で，美術史を専門とする岡部紘三，髙阪一治が続く。平成７年の教養部廃止を機に髙阪は美術講座所属となる。

以上のように，船井の担当学科目の移動，その後の美術教育を進める会の中心人物の大勝・浜本・菅沼の赴任によって，鳥取大学において制度上は美術教育学の人的整備が確定された。

(3) 教科教育専攻大学院の設置と展開

平成６年４月に鳥取大学に大学院教育学研究科が設置される。平成８年４月に美術教育専修は開設される。大学院を設置するには教官の資格審査があり，この時期，全国的に教官の異動や専門分野の移動等が多数あった。特に，大学院設置要件の教科教育㊟教官１名，合教官１名は，当時その業績を満たす研究者が限られたため揃えるのが大変であった。鳥取大学の場合，平成４年に高浦浩が，平成７年に喜久山悟が採用される。高浦は，平成４年に転出した菅沼の後任としての採用であった。喜久山は，院設置のための純増であった。

高浦浩（島﨑と改姓）は[74]，東京学芸大学教育学部を昭和38年３月に卒業し，東京学芸大学附属小金井小学校教

諭等を経て鳥取大学に赴任する。赴任前に児童の描画における躓きを長年研究していた。赴任後の論文に，「児童画における『いきいき』の検証―美術教育におけるキーワードの検証」（『鳥取大学教育学部研究報告』第34巻第２号，平成４年），「子どもの美の位相Ⅰ－小･中学生の美の対象－」（前掲書，第36巻第２号，平成６年）等がある。また，絵画の作品発表を毎年続けていた。

喜久山悟は[75]，沖縄県出身で，平成元年に熊本大学教育学部を卒業，平成３年に横浜国立大学大学院を修了した後，国立総合児童センターの「こどもの城」に勤務する。その後，鳥取大学に赴任する。平成25年に熊本大学教育学部に転出する。漫画や工芸やワークショップをテーマに，「『造形ボキャブラリー』としての漫画」（『大学美術教育学会誌』第25号，平成５年），「工芸と今日の小学校図画工作―ミニチュア椅子の制作実践から―」（『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』鳥取大学地域学部，平成24年）等を発表した。漫画作品の発表や工作･工芸作品の発表，ワークショップの実践を続けていた。

二教官とも美術教育論文発表だけでなく，実技作品発表をしていたことが特徴的である。

高浦と喜久山の着任により，教科教育二教官が揃い，院設置となる。以上のように，鳥取大学においては，高浦と喜久山の赴任により，制度的に美術教育学が成立したと言えよう。

美術教育専修全体としては，絵画：上田敏和，彫刻：石谷孝二，デザイン：平井覚，工芸（金工）：矢部雅一，美術理論･美術史：髙坂一治，美術科教育：高浦浩･喜久山悟でスタートする。なお大学院設置の頃，論文を発表する実技教官もいた。

その後の学部に関する展開を少し示しておく。平成11年４月，改組によって教育学部は教育地域科学部となる。教育地域科学部は，学校教育課程･人間文化課程･地域政策課程･地域科学課程の四課程から成る。学校教育課程が学士（教育）を出し教員養成をする。美術講座の教官の所属も変わり，学校教育課程に高浦･喜久山の二人，人間文化課程に上田･石谷･平井･矢部･髙阪の五名となる。なお学校教育課程は教育に関する分野の教官が，人間文化課程は美術･音楽･舞踊を専門とする教官が所属した。

さらに，平成16年４月，大学法人化に伴い，鳥取大学の教員養成課程の学生定員70名を島根大学に，島根大学の教育職員免許取得を卒業要件としない課程の学生定員100名を鳥取大学に移動し，全国初の県境を越えて再編統合を実現させ，教育地域科学部は地域学部に改組される[76]。美術講座の教科教育の教員は地域教育学科へ，教科専門の教員は芸術文化センターの所属となる。なお芸術文化センターは美術･音楽･舞踊にアートマネージメントを加えた新組織として発足し，地域貢献を主目的として，学生定員のない形でスタートした[77]。これによって鳥取大学の場合，新たな段階に入ったと思われるが，それについては本稿の考察範囲を越えるので事実を示すに止める。

４．結論

鳥取大学の美術教育学の制度的基盤の成立過程（人的制度の成立と人的配置）を以下のように明らかにした。

1. 鳥取師範学校から鳥取大学学芸学部への移行期：美術科教育を専門とする教官はいなかった。ただ，学科目制度に先んじて美術科教育関係授業を担当する教官として，船井美周が定着していった。制度的には美術科教育の専門性は未だ保証されず，「美術教育学」も認識されていなかった。
2. 学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年学科目制度発足後も，学科目「美術科教育」は暫く置かれず，昭和48年４月に新設された。それまで学科目は絵画で，授業は絵画と美術科教育を担っていた船井が，学科目「美術教育」の担当となった。これによって，美術科教育の専門性は制度的に保証されたと言える。船井は名目だけの学科目「美術科教育」担当ではなく，美術科教育に関する研究をしていく。そして船井の後任には，大勝恵一郎，浜本昌宏，菅沼嘉弘と「美術教育を進める会」の歴代代表が続く。
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：平成４年に高浦浩，平成７年に喜久山悟と美術科教育を専門とする二教官が赴任し，平成８年４月に大学院教育学研究科美術教育専修が設置された。鳥取大学の場合，この時期に美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

以上のように，鳥取大学における美術教育学の制度的基盤は成立したと結論する。

謝辞

調査にあたってご協力いただいた鳥取大学地域学部教授石谷孝二先生，諸氏に厚く御礼申し上げます。

付記

本稿は，本学における平成23年度「若手教員に対する支援」による研究成果の一部である。

註

1）有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程―島根大学における人的制度と配置―」『島根大学教育学部紀要(教育科学)』第45巻，平成23年，47-55頁。金子一夫・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程―東京芸術大学の場合―」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第62号，平成25年，123-135頁。

2）「鳥取大学学則」第三十三条(鳥取大学学芸学部『学生手引』所収「学生便覧」昭和25年４月１日,49頁)

3）「鳥取大学学則」第三十三条(鳥取大学学芸学部『学生手引・単位履修の手引』所収「学生手引」昭和28年４月１日,３頁。同『学生便覧』昭和29年４月１日)

4）「鳥取大学学則」第二十八条(鳥取大学『昭和55年度大学便覧』)

5）教育地域科学部の四課程ではそれぞれ次の学位が授与された。学校教育課程:教育学士。人間文化課程:教養学士。地域政策課程：地域社会学士。地域科学課程：地域科学士。なお平成３年度卒業生から「学士(教育)」という表記に変わる。

6）なお大学院地域学研究科では，地域創造専攻は地域学，地域教育専攻は教育学の修士の学位が授与される(『鳥取大学地域学部/大学院』(平成26年度パンフレット)30頁)。

7）次の資料を参照して表を作成した。鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学三十年史』鳥取大学，昭和58年。鳥取大学創立50周年記念誌編集・刊行委員会『鳥取大学五十年史』鳥取大学，平成13年。中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』昭和５－７，９-12年版。鳥取県教育会『鳥取県学事関係職員録』鳥取県教育会事務所，大正15-昭和３，昭和５-10,12-18,20-21年度版。鳥取県教育関係職員互助会/鳥取県教育委員会事務局調査企画課/鳥取県教育委員会指導調査課/鳥取県教育委員会庶務課/全国教育調査研究会鳥取支部/鳥取県教育調査研究協会『鳥取県教育関係職員録』昭和25,27-28,31-43,47-平成15年度版。鳥取大学学芸学部『学生手引』昭和24-25,27-28年度版,『学芸学部履修規定』昭和26年度,『学生便覧』昭和29-31年度版『履修規定とその解説』昭和32-36年度版の各所収「教官名簿」。大正15年度から平成15年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが，昭和２,４,19,22,23年度のものは確認できなかった。なお昭和25年度『鳥取県教育関係職員録』の「発刊のことば」に，教職員録は鳥取県教育会の解散に伴い昭和22年度版を最後として以後出版されていなかったとある。すなわち昭和23・24年度版は存在しないと思われる。さらに次の資料を参照して補正した。
「職員異動」鳥取県女子師範学校『校友会誌』第３号，鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校校友会，昭和７年，124-126頁。「歴代職員」鳥取県師範学校学友会『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，昭和12年，93-100頁。「職員」鳥取県女師師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』昭和12年,96,116-121頁。鳥取県師範学校『鳥取県師範学校要覧(昭和十六年七月)』昭和16年，６-８頁。鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校『校友会同窓会会員名簿(昭和十二年七月現在)』昭和12年，２,３,５,７頁。「母校奉職の恩師」有終会『会員名簿』第10号(昭和十六年七月調)，昭和16年，128-134頁。鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿(昭和二十三年四月現在)』昭和23年，１－５頁。「恩師消息(昭和二一年六月～二四年三月)」鳥取師範学校男子部本科昭和二十四年三月卒業生『鳥取師範学校 卒業三十周年記念誌』昭和54年，７－９頁。「恩師消息」卒業四十周年記念誌刊行委員会『永久のいのちを－卒業四十周年記念誌－』鳥取師範学校昭和二十四年卒業同期生会，平成元年，253-256頁。鳥取県師範学校昭和十五年三月卒業生『五十周年記念誌』昭辰会，平成２年，52頁。鳥取大学『学生便覧』昭和31・58年度版。鳥取大学学芸学部『会員名簿(昭和35年版)』鳥取大学学芸学部同窓会，昭和35年。鳥取大学『鳥取大学研究者一覧(昭和36年度)』昭和36年。鳥取大学研究者総覧編集会議・鳥取大学庶務部庶務課『鳥取大学研究者総覧(1986)』昭和62年・『同(1991)』平成４年・『同(1997)』平成９年・『同(2001)』平成14年。鳥取大学産学連携推進機構『研究者総覧2005』平成17年。「歴代教員配置一覧」鳥取大学教養部『回想の教養部』平成７年，及び同書９-10頁。上田保子『上田敏和展-時のひびき-』上田敏和，平成18年，42-43頁。

8）鳥取大学及び鳥取大学学芸学部に関する基礎的事項に関しては次のものを参照した。鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書。鳥取大学創立50周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書。

9）鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，141-143頁。

10）前掲，148頁。

11）前掲，及び鳥取大学総務企画課『2014［平成26年度］国立大学法人 鳥取大学［大学概要］』４頁。

12）教養関係講座・教養部に関しては，鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，657-717頁，及び鳥取大学教養部，前掲書を参照した。

13）「学芸学部創立当初の開設講座および教官定員一覧」鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，146頁，及び鳥取大学学芸学部『学生便覧』昭和25年４月１日，３－４頁。

14）「教授組織(昭和26年度)」鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，162頁，及び鳥取大学学芸学部『学生便覧』昭和25年４月１日，３－４頁 。

15）「学芸学部創立当初の開設講座および教官定員一覧」「教授組織(昭和26年度)」鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，146,162頁。

16）八田の経歴に関しては，「八田正夫年表」角秋勝治編『ミューズの遍歴 八田正夫画集 生誕100年記念

出版』パレット，平成19年，96-99頁を参照した。

17）鳥取大学『鳥取大学研究者一覧(昭和36年度)』9頁によると，八田の研究テーマとして，1.実技：絵画，油画･彫刻(テラコッタ)･陶芸(釉薬の研究)，2.理論：芸術史―芸術の背景と様式との関係･芸術理解鑑賞指導の方法と其の資料の作成が挙げられる。角秋勝治編，前掲書，89頁によると，昭和27年の鳥取大火を機に，火に強い焼き物やテラコッタへの意欲が湧いたとのことである。

18）池本の経歴に関しては，編集工房炬火舎『西谷部落誌』西谷部落誌編集員会，平成17年，88-89頁，鳥取市教育委員会『はばたくとっとり文化 鳥取市文化賞受賞者の記録』鳥取市教育委員会，42,66頁，池本喜巳『未来への記憶 因伯の肖像』今井出版，平成26年，76-77頁を参照し，さらに鳥取大学の教示を基に補正した。

19）編集工房炬火舎，前掲書。

20）同上。同書に示される「文部省中等大学教官免許」は「文部省中等教員検定試験」のことと思われるが確認できなかったので，そのまま記す。

21）鳥取県教育関係職員互助会『鳥取県教育関係職員録』昭和25年。

22）鳥取大学創立30周年記念誌編集･刊行委員会，前掲書，237頁，昭和27-28年度『学生手引』，昭和29-31年度『学生便覧』，昭和32-36年度『履修規定とその解説』。

23）船井の経歴に関しては，船井の遺稿及び遺作をまとめた「船井美周略歴」船井美周『絵画･美術教育への思索』船井武彦，平成９年，及び『船井美周画集 折々の彩』船井武彦，平成10年，各奥付頁を参照し，さらに鳥取大学の教示を基に補正した。

24）鳥取大学学芸学部『同窓会名簿(昭和35年版)』では船井の担当は図画と示され，鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿(昭和二十三年四月現在)』では船井の担当は図画工作と示される。

25）ニシオトミジ「美周先生を思う」『船井美周画集 折々の彩』平成10年。

26）横川の経歴に関しては，７)で挙げた資料を参照した。

27）鳥取大学創立30周年記念誌編集･刊行委員会，前掲書，187頁。

28）浜田の経歴に関しては，「年譜」鳥取一中黒鳳会『浜田重雄(宜伴)画業回顧展』鳥取一中黒鳳会，昭和52年を参照した。

29）浜田重雄「〈参考〉逝きし洋画壇の明星 前田寛治の死」鳥取一中黒鳳会，前掲書。

30）松上の経歴に関しては，松上茂『デザインによる教育』美術出版社，昭和37年の奥付頁の著者紹介を参照した。そこには帝国美術学校図案科卒業とあるが，木材工芸科卒業とする資料もある。

31）米原穣は，鳥取県会議員･貴族院議員になった実業家米原章三の長男で，ドイツ文学研究者であったが鳥取大学から実業界に転じ日本海テレビション社長等となる。弟は日本共産党幹部の米原昶(いたる)。昶の長女がエッセイストでロシア語同時通訳者の米原万里。

32）西田の経歴に関しては，「年譜」西田亨『西田亨画集』講談社，昭和60年，162-166頁を参照した。

33）鳥取大学学芸学部『会員名簿(昭和35年版)』では，西田は鳥取師範学校女子部の工作担当と示される。同書では女子部の船井が絵画担当と示されるので，西田が工作，船井が絵画を分担していた時期があると思われる。

34）茨城大学教授金子一夫氏の談話より。

35）若林稔に関して，鳥取大学学芸学部同窓会『昭和35年版 会員名簿(昭和35年版)』によれば，昭和22-23年頃に女子部の図画教諭に若林稔が在職している。鳥取師範学校女子部『同窓会会員名簿(昭和二十三年四月現在)』によれば，昭和23年４月現在において，前職員に若林稔の名が挙がる。よって昭和22年頃から23年３月までのある期間に若林稔が在職していたことがうかがえる。なお『同窓会会員名簿(昭和二十三年四月現在)』によれば，昭和23年４月の時点で東京都に居を移していた。

36）文検手工同志会『昭和十年 会員名簿』昭和10年。

37）藤田の経歴に関しては，鳥取師範学校昭和二十四年卒業同期生会，前掲書，256頁，及び鳥取県師範学校『鳥取県師範学校要覧(昭和十六年七月)』６－８頁を参照した。

38）吉岡の経歴に関しては，卒業四十周年記念誌刊行委員会，前掲書，256頁，鳥取大学学芸学部『会員名簿(昭和35年版)』14頁，群馬大学教育学部百年史編修委員会『群馬大学教育学部百年史』群馬大学同窓会，802頁を参照した。

39）青山の経歴に関しては，『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，98頁，及び鳥取県女師師範学校･鳥取県立八頭高等女学校，前掲書，117頁を参照した。

40）金子一夫『近代日本美術教育の研究-明治時代-』中央公論美術出版，平成４年，460頁。

41）有川の経歴に関しては『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，99頁を参照した。

42）図画教育奨励会『美育』第16巻第６号，昭和15年，56頁。

43）小川登「昭和四十年頃」武田学園『武田学園創立三十五周年記念誌』武田学園，昭和58年，261-263頁。

44）山口に関しては，『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，116頁を参照した。なお鳥取大学学芸学部同窓会『会員名簿(昭和35年版)』13頁では昭和35年現状は「大阪市大谷高等学校」，有終会『会員名簿』第10号(昭和16年７月調)134頁では昭和16年現在は「大阪市大谷学院」とある。

45）光岡の経歴に関しては，鳥取県女師師範学校･鳥取県立八頭高等女学校『創立十周年記念誌』96,120頁，及び鳥取県女子師範学校･鳥取県立八頭高等女学校『校友会同窓会会員名簿(昭和十二年七月現在)』２－３,５－７頁を参照した。鳥取県女子師範学校･鳥取県立八頭高等女学校校友会編集部『緑丘』第５号，

昭和９年３月，１－５頁に光岡始の研究論説「近代の絵画」が寄稿される。

46）図画教育奨励会『美育』第15巻第３号，昭和14年，54頁。

47）山田敏雄「回想十六年」武田学園，前掲書，267-268頁。

48）中野の経歴に関しては，鳥取県教育会『鳥取県学事関係職員録』昭和14-16年度を参照した。

49）佐藤の経歴に関しては，『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，99頁を参照した。なお文検手工同志会，前掲書では昭和10年頃は仙台市市役所学務課勤務とあるが，同姓同名の別人か否かの確認はとれていない。

50）加納に関しては，如泉会々員名簿作製委員会『如泉会名簿』高知大学教育学部内如泉会，昭和30年，及び図画教育奨励会『美育』第17巻第７号，47頁を参照した。

51）『尚徳』創立五十周年校舎改築落成記念号，117頁，及び鳥取大学学芸学部『会員名簿（昭和35年版）』93頁。

52）鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，145頁。

53）「昭和24年度開設科目および担当者一覧」鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，148-151頁でも同じことが示される。

54）この学芸学部開設期の教官所属と担当授業の齟齬は，鈴木慎一朗「鳥取大学学芸学部小学校教員養成における音楽教育実践－カリキュラムに着目して－」鳥取大学大学教育支援機構教員養成センター『鳥取大学教育研究論集』第４号，平成26年，40頁においても指摘される。なお本論文は音楽講座のカリキュラムを詳細に解明している。

55）芸術授業は「芸術（1）」「同（2）」あるいは「芸術A」「同B」等の名称で前期と後期に開講していた。美術と音楽の教官はそれぞれ前期か後期かを担当していたと思われる。「昭和26年度講義題目一覧」鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，663-664頁はそれを明確に示し，本文中で示した鳥取大学学芸学部発行資料もそれを明確に示す年度のものもある。

56）田村も榊も音楽講座の教官であるが，「芸術」授業の「授業の目的及び授業内容の説明」には「音楽概論，東洋，西洋の絵画，彫刻，工芸，建築の変遷の概説とその鑑賞による芸術への理解」とあり，美術のことも扱うように記されている。

57）「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」及び同省令の一部を改正する省令に関しては，現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料25』東京法令出版，昭和62年，286-457頁及び511-688頁を参照した。

58）現代日本教育制度史料編集委員会，前掲書，411，640頁。

59）鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，845頁。

60）前掲，175頁。なお同書175頁には次のように記される。「名称変更には強い反対意見もあった。教育学部となることは教員養成の目的を明確にするもので，学芸学部設立の趣旨にそぐわないというものであったが，名称統一が文部省の方針で，国立学校設置法の一部改正の国会上程を目前にひかえ〔中略〕賛成することとなった」

61）同上。

62）「美術教育を進める会32年の歩み」美術教育を進める会HP（http://home.att.ne.jp/theta/susumerukai/rekisi1.htm）を参照した（平成26年９月25日確認）。

63）大勝の経歴に関しては，花篤實「鈴木寛男氏および大勝恵一郎氏の学会特別表彰について」『美術教育学－美術科教育学会学会誌』第20号460-461頁，及び「著者略歴」大勝恵一郎『美的教育の展開』ビッグペン，平成４年，391頁を参照した。

64）浜本の経歴に関しては，浜本昌宏『ナイフでつくる』民衆社，昭和52年，奥付頁の著者紹介を参照した。

65）菅沼の経歴に関しては，菅沼嘉弘『シリーズ・あそんで作る５ 土とあそぶ』草土文化社，昭和61年，奥付頁の著者紹介を参照した。

66）西村の経歴に関しては，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科HP（http://www.office.hyogo-u.ac.jp/jgs/member/data/NISHIMURA_T）を参照した（平成26年９月20日確認）。

67）大木の経歴に関しては，researchmap HP（http://researchmap.jp/read0170264/）（平成26年９月20日確認）を参照した。

68）鳥取大学創立30周年記念誌編集・刊行委員会，前掲書，239頁。

69）浜田一郎は，旧姓米本で，結婚により浜田姓となる。米本姓で作品発表する。

70）浜田の経歴に関しては，浜田智世子『独孤峯 米原一郎 遺稿と追悼』浜田道郎，平成６年，及び「米本一郎年譜」倉吉博物館『郷土作家シリーズNo.14米本一郎遺作展』倉吉博物館，平成６年，83-90頁を参照した

71）角秋勝治「八田正夫論 ミューズの遍歴-日本的洋画を求めて-」角秋勝治編，前掲書，86頁。

72）浜田に関しては，浜田重雄，前掲書を参照した。八田に関しては，角秋勝治，前掲書，85-89頁，及び鳥取市教育委員会『はばたくとっとり文化 鳥取市文化賞受賞者の記録』44頁を参照した。

73）前田明範「米本一郎の画業」倉吉博物館『郷土作家シリーズNo.14米本一郎遺作展』倉吉博物館，平成６年，77頁。

74）高浦の経歴に関しては，鳥取大学研究者総覧編集会議/鳥取大学庶務部庶務課『鳥取大学研究者総覧1997』鳥取大学，平成９年，42頁を参照した。

75）喜久山の経歴に関しては，同上，44頁を参照した。

76）島根大学HP（http://www.shimane-u.ac.jp/_common/images/01/stories/pdf/jouhoukoukai/gyomu/genkyo_chosa/edu_e.pdf）（平成26年９月20日確認），及び機関誌「尚徳」編集委員会『尚徳』第124号（最終号）教育振興尚徳会，平成25年，６頁を参照した。

77）平成21年度より地域学部地域文化学科に芸術文化コースが開設され，学生募集がなされる。